

4. 地域 COE の構築

霞ヶ浦は、水道用水、工業用水、農業用水の重要な水源となっているばかりでなく、水産業や観光とその美しい自然や豊かな水が私たちの生活に限りない恩恵をもたらし、本県にとってかけがえのない財産である。

このような多面的機能を持つ霞ヶ浦の保全は、県政の最重要課題と位置付けられて水質浄化に取り組んでいるところであり、昨年策定された第4期の湖沼水質保全計画により、これまで以上に水質浄化に向けた施策を強力に推進していくこととしている。

茨城県地域結集型共同研究事業霞ヶ浦水質浄化プロジェクトは、財団法人茨城県科学技術振興財団が中核機関となり、事業総括を角田芳夫副知事、研究統括に東北工業大学須藤隆一客員教授として、「富栄養化の要因である窒素・リン対策を念頭に置いた効率的高度処理技術の開発」を研究目標に、平成9年11月から5年間にわたり、産・学・官による共同研究を実施してきた。

これまで、国立環境研究所の稲森悠平主席研究員、筑波大学応用生物化学系の松村利正教授、筑波大学農林工学系の前川孝昭教授、氷鮑(ひがの)揚四郎教授をグループリーダーのもと、13名のコア研究員が、企業、大学、国・県の研究機関と連携して、霞ヶ浦の水質浄化に向けて研究・技術開発に取り組んできた。13名のコア研究員のうち8名は、中国、韓国、フィリピンからの研究員で、世界の湖沼環境再生へも貢献できる研究・技術開発に取り組んできたと考えている。

平成12年度からは、第2フェーズに入り、第1フェーズでの研究成果に基づく研究の絞り込みや試作品の製作、要素技術の組み合わせにより、企業化・実用化に向けた実証的な研究を進めてきたところである。

具体的には、前川グループリーダーを中心として研究を進めてきた「電気化学的高速廃水処理装置の開発」や、松村グループリーダーを中心とする「アオコの溶藻細菌の同定」、稲森グループリーダーを中心とする窒素ばかりでなくリンも除去可能な「高度合併処理浄化槽の開発」、さらには氷鮑グループリーダーを中心とする「総合的な流域管理手法の開発」などにおいて、多く

霞ヶ浦環境センター(仮称)の概要

所在地	土浦市沖宿町及び霞ヶ浦町戸崎地内
敷地面積	約3.3ha
建物の面積	建築面積: 約3,800m ² 延床面積: 約5,000m ² (研究ゾーン: 約2,300m ² 、展示交流ゾーン: 2,700m ²)
建築にあたってのコンセプト	霞ヶ浦や水をテーマとした環境・人にやさしい施設 展示・交流・学習・研究を通じ、自然と共感する環境学習拠点 環境への負荷削減
建物における環境への主な配慮事項	周辺環境への配慮 省エネ、省資源 エコマテリアル 適正使用・適正処理
開館予定	平成17年

の成果が得られたところである。

また、この地域結集型共同研究事業は、「ネットワーク型地域 COE(知識・技術の集積拠点)」の構築も目指しており、現在茨城県が整備を進めている「霞ヶ浦環境センター(仮称)」に引き継がれ、センターの研究機能において大きな役割を果たすことになるものと考えている。

この霞ヶ浦環境センター(仮称)は、「人と自然の共生する環境の保全・創造」を基本理念として整備するものである。センターの機能としては、一つには、水環境に関する地域研究機関の中核として、霞ヶ浦をはじめとする県内の湖沼・河川の汚濁メカニズムの解明や、霞ヶ浦の流域全体を視野に入れた総合的流域管理等の研究のための拠点としての機能である。二つには、霞ヶ浦をフィールドとして行う環境学習の推進や、国内外の研究機関・研究者との交流や、世界に向けた水環境に関する情報の発信などの拠点としての機能である。

この度の霞ヶ浦水質浄化プロジェクトの研究成果が霞ヶ浦の水質浄化に大きく寄与し、また、新産業の創出などが図られることを期待すると共に、この研究により培われた人的・組織的ネットワークを霞ヶ浦環境センター(仮称)に継承し、研究開発事業や住民との連携構築が一層促進され、霞ヶ浦の水質が改善されるよう努めたいと考えている。



霞ヶ浦環境センター(仮称)の4つの機能